

ロベルト・ミヘルスの同時代人論 (3)

——チューザレ・ロンブローゾ——

訳者前書き

チューザレ・ロンブローゾ（一八三六—一九〇九）の名は我が国においては刑事政策と犯罪学の分野においてのみ知られている。即ち、犯罪者の身体的、精神的特徴を調査し、これらの学問に人類学的、実証的方法をもちこんだ近代的な刑事学の創始者としてである。彼の「先天的犯罪人」論はこの分野ではあまりに有名であるが、それは当時の社会ダーウィニズムの影響を強く受け、ミヘルス言うところの「力強い一面性」をもって生物学的決定論に傾斜したため、ロンブローゾ自身、愛弟子エンリーコ・フェッリの影響を受けつつこれ

ロベルト・ミヘルスの同時代人論 (3) 氏家

氏 家 伸 一

を修正せざるを得なくなったとされる。この生物学的決定論の一面性は次のような『犯罪人論』の一節からもうかがえよう。

「これは単なる発想とといったものではなく、神の啓示であった。この頭蓋骨を一目みた瞬間、突然、私は、燃え上る天空の下に何もかも照し出されて、犯罪者の特性の問題がすべて分ったような気分になった。すなわち、先祖返りの犯罪者は、自らの中に下等動物や原始人の悪どい本能を再現するものだど悟ったのである。」

「犯罪人、特に窃盗犯の頭蓋骨の容積は、常人や精神病者のそれより小さい。」

一九〇六年、トリノ大学は彼のために犯罪人類学の講座を創始した。

現代、ロンブローゾの理論は犯罪学史上の歴史的な意味しかもたないとされている。しかし、思想的にはこの歴史的な意味こそ重要であり、ミヘルスのロンブローゾ評伝もその意味で興味をそそる点を有している。ミヘルス自身最後にこう述べている。「この伝記的スケッチの目的は、ただただ、あまり知られていないこの興味深い人物の若干の特徴を性格学的に示すことにある。」本評伝の後半部はロンブローゾの人柄や生活を巧みに描いている数少ない文章といえよう。

さて、政治思想的な視点からみても、ここには幾つかの重要な論点が伏在している。ロンブローゾという一九世紀のイタリアの知識人を通して現われた諸問題である。民主主義的で愛国的なブルジョア知識人がどのようにして社会主義を支持するようになったか。その彼がどうして社会党と労働者階級に失望するようになったのか。愛国主義やナショナルリズムがどうして社会主義と共存できたのか。社会主義と社会ダーヴィニズムの関係はイタリアではどうだったのか。これらの問題に答えるためにはイタリア社会主義全体の特徴を分析する必要があるが、ここでは、ミヘルス自身の研究から、

初期のイタリア社会主義におけるブルジョア知識人の役割に関する部分を紹介しておこう。

ミヘルスは一九〇五年から翌年にかけて「イタリア社会主義運動におけるプロレタリアートとブルジョアジー」という比較的長い論文を発表しているが (Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. 21, 1905, Bd. 22, 1906) 次のような、一見逆説的な命題から書き始めている。「社会・経済的に抑圧された社会階級の解放運動のすべては、その原動力と指導層を、台頭する階級自身からよりは、むしろ攻撃された旧社会の胎内から受け取るということは、確実な歴史的事実と考えられる」。ここから、大学卒のインテリや他のブルジョア層出身の若者が社会革命にとっても意義という問題が生ずる。ミヘルスによると、この点を鋭く見抜いていたのは他ならぬ、バクティンであった。バクティンは、「人民の生活そのものから生れた思想の助産婦」の役割、プロレタリアートの無意識的だが強い熱望を混沌の段階から明晰の段階へと高める役割を、このブルジョアジー出身の、とりわけ若いインテリ達が負うのであり、従って彼らの参加は「労働運動の生存条件」でさえあると考えていた。このような認識は、工業化のおくれたイタリアにおける社会主義の創

初期には妥当する。社会主義者が犯罪者とみなされ、言葉で表現できないほどの弾圧と虐待が日常的だった当時のイタリアにおいて、それに耐えられるのは学生や青年の正義感であり、彼らの内面での理念の優位であった。暗殺された社会主義者は無数に存在した。ミヘルスは述べている。「唯一ロシアを除いて、イタリアほどに、労働運動がその生誕の初期に、かくも消耗させる闘い、恐るべき闘いに耐えてきたところは世界には一つもない。」イタリアとロシアにおける初期社会主義をめぐる状況の類似性はコールも指摘するところである。(G. D. H. Cole: "A History of Socialist Thought: Volume III, Part II") (この点については、本誌次号掲載の「デ・アミーチス」も参照して欲しい。)

「社会主義と社会主義政党はインテリの政党より生れる」。第二の命題といえよう。社会党国会議員に占める大学教授とブルジョアジーの数についてミヘルスは興味深い調査をしている。一九〇三年のイタリアとドイツを比較すると、それらは各々八五パーセントと一六パーセントであった、というものである。ロンブローゾもその一人であったことはいうまでもない。

ミヘルスはイタリアの初期社会主義の優れた研究家であっ

ロベルト・ミヘルスの同時代人論 (3) 氏家

た。社会主義運動における知識人とブルジョアジーの優位という問題は、その後の発展の中で大きな思想史的問題を残すことになった。つまり、それへの反動としての、ミヘルス自もコミットしたサンディカリズムの登場がそれである。イタリアでは、本評伝にも名を出すアルトゥーロ・ラブリオーラがその代表であろう。この点については次号において触れてみたい。

最後に、ミヘルスはトリノにおけるロンブローゾ・サークルともいうべき知識人のサロンについて報告しているが、おそらくミヘルスはこれを書きながら、かつてドイツのハイデルベルクで体験したウェーバー・サークルのことを想い出していたことであろう。

チェーザレ・ロンブローゾ

Archiv di Antropologia Criminale,  
Psichiatria e Medicina Legale, Bd.  
XXXII, Heft IV-V, Torino 1911.

フランソワ・ケネーからフリードリッヒ・ニーチェまで、及びダーウィンからカール・マルクスまでのあらゆる近代的学問の使徒や創始者と同様、チェーザレ・ロンブローゾも又、

(一五三) 一二五

誇り高い独立性と力強い一面性をもって自らの新理論を樹立し、弁護し、そのために初めから絶対の客観性というものを断念し、こうして多くの人々に対してその価値を殷損してしまつた。それは、個人的虚栄とは常に全く無縁だつた彼が他の体系並びに科学と調和をつけながら、自らの教義の一部を修正し、現実により適合させようと企てるまで続いた。言い換へれば、ロンブローゾは最初は純粹な生物学者、人類学者であつたのだが、長い間には、当初は熱中のあまりその働きを看過してゐた社会的、環境的契機にも必要な承認を与える氣になつてきたのである。元々は彼の体系の特質には触れるところのなかつた、彼にとつても新しい観点を考慮する必要を確信するや否や、ロンブローゾはもぢまへの学問的勇氣を以て、社会的契機、少くともその概容にだけでもアプロチシ始めた。かくしてロンブローゾは、解剖学的構造と精神病理学的態度とを備えた、孤立化された人間の現象論を幾度か放棄し、人間をその環境の中で把握する方法へと踏み出したのである。

ロンブローゾのこの新しい方法の帰結は、五七才の高齡にもかかわらず彼が、それまでは自分の回りで脈打つ生活に留意せず、誤りを犯してきたと包み隠さず告白しながら、彼の

全生命表現の特徴である精神的な新鮮さ、柔軟さ、率直さを以て、政治的闘争場へと降り立ったことである。その際は同時に、自分の専門科学の提起する問題には常にかつ永久に専心するけれども、しかしながら今後は政治の大問題から目を逸らすことは決してないであろうと、同時代人に厳かに約束したものである。<sup>(1)</sup>

(一) Vgl. Cesare Lombroso: Il Momento Attuale. Milano 1904. Casa. Ed. Mod., p. 11.

ロンブローゾはこの約束を守つた。イタリアの祖国や、それどころか世界にもかわる問題、それらを揺がすあらゆる問題にロンブローゾは、波瀾に富んだ人生に於ける晩年の約一五年間にわたり、力強く、彼の氣性に相応しく生々と、物怖じすることなく取りくんたのである。その際は、自らが民主主義とその公準への強い共感によって動かされていることを証した。自由の大義のために闘い、それが社会的、経済的、もしくは衛生上の習慣のいずれであれ、それらの進歩の思想を促進する必要がある場合はいつでも、ロンブローゾは自分の名前に物を言わせた。彼は公的文書に於いても激しい言葉遣いを辞さず、すべての弱者と被抑圧者に希望を与えることを己れの使命と看做してゐた。一九〇六年ローマのイ

タリア社会党中央機関誌に発表された美しい論説でロンブローゾは自らの自由への固い信念を非常に情熱的に表現したために、度を越して、国主暗殺は罰しなければならないが、自由暗殺（自由の暗殺）も全く同様に大罪である、たとえ多くの判事がそれに加担したとしても、と叫び出すほどであった。<sup>(1)</sup>矛盾を恐れずに言うなら、ロンブローゾは、彼が公共生活に有害と看做した現象に烙印を押し、出来る限りそれを無害化するためには、どんなチャンスをも見逃さなかった、という命題を呈示してもよからう。生来的犯罪人（*delinquente*）の影響範囲を、彼を取り巻く外的状況の改善によって制限すること、自らの天与の傾向に屈服するチャンスを可能な限り彼から取り去ることによって、彼をたぶん有用とまではいかなくとも、少なくともはや害の無い社会人に変えること、約言するなら、ここに、この大家の政治綱領が存したのである。時には、進歩した社会では、生来的犯罪人の内にさえ眠っている人間の能力の活用は完全なものとならうという確信を表明するまでになった。<sup>(2)</sup>

(1) *Cesare Lombroso: Le Due Giustizie in Italia, im "Avanti"*, 1906, Nr. 3372.

(2) 一九〇四年「Avanti」に掲載された一論文より。

ロベルト・ミッヘルスの同時代人論(3) 氏家

とにかく、生来的犯罪人というロンブローゾの人類学的、生物学的確認こそが彼を促して、生物学的に不変の事実からその社会的宿命、社会的運命としての性格を払拭するために、社会的な予防の可能性を模索せしめたのである。

一八九三年チエーザレ・ロンブローゾが、丁度レヅジョ・エミールで第三回大会を開いていた若い社会党の大会で、党员として入党することを宣言し、こうして母国の若い労働運動にコミットするという思い切った一步を踏み出した時、彼をそこまで突き動かした事情というのは非常に複雑なものであった。中でも重要なものとしては、必要な変更を加えればガリバルディの「第一……<sup>(1)</sup> 訳者補注、以下同様」インタナショナル加入の場合と同様、愛国的な動機が指摘できよう。チエーザレ・ロンブローゾは常に熱烈なイタリア愛国者であった。しかし、遠くからいつも注目していた政治の領域では、長い人生も彼には幻滅しかもたらさなかった。例外はペララガ病撲滅のための立法措置で、議会は、この学者がこの問題に捧げた長年に亘る科学的研究と愛国の啓蒙活動に対しこの立法措置で報いたのであるが、これを除けば、ロンブローゾが祖国の福利のために衛生学と刑法の分野で献策したことはほとんど何も実行されなかった。かくしてロンブローゾは、

(二五五) 一一七

政府には本質的に、本来の機能を果す能力が無く、支配階級の方は完全な保守主義に捉えられていると観念するようになった。彼は、大量の失業と移民、文盲への頑固な固執、鈍感で旧態依然たる外交——これでは、外国に於いて、又外国からイタリア人への尊敬をかち得ることは出来ないであろう——は、イタリア政治の最大悪であると断言した。更に所謂自由主義体制も又、内政的には決して安泰ではなく、市民の自由もそれ相応に尊重されているわけでは決していない。これらの現象の総体を、激怒したロンブローゾはイタリアの小児病、イタリアの人的、物的悲惨と呼んでいる。<sup>(2)</sup>

(1) *Robert Michels: Sozialismus und Fascismus als politische Strömungen etc., I. c., Bd. II.: Sozialismus und Fascismus in Italien, S. 32ff.*

(2) チェーザレ・ロンブローゾは、政治に関する論文の大部分を先述した、ローマにある社会党中央機関紙『アヴァンティノ』の他に、マジヨリーノ・フェラーリスの編集する自由主義的月刊誌 *Nuova Antologia*「それに同じ町」[ローマ]で出されているフェッリの月刊誌 *Il Socialismo* に発表した。残念ながらこれらの論文のほとんどは単行本の形では出ていない。一部のみが既に *Il Momento attuale* に収録されている。

政治問題でロンブローゾに影響を与えたのが彼の愛弟子でローマの有名な刑法学者のエンリーコ・フェッリであった。

とは明らかで、フェッリ自身既に多年に亙り政治を志向し、丁度極右のブルジョア派から極左の社会主義に転向したところであった。<sup>(1)</sup> これには、曾ての共同研究者で後に彼の女婿となった歴史家グリエルモ・フェッレロー——彼は、ロンブローゾの才媛ジーナと結婚し、今はトリノのレニャーノ通二六番地にロンブローゾと同居していた——の少なからざる影響が加わった。それに彼の二人の娘自身、一人はこのジーナ博士で、もう一人、教育問題に取りくんていたバオラはトリノ大学の医学史教授に嫁いでいたのだが、二人共、一九世紀の九〇年代末には急進的政治の熱烈な支持者となり、革命的プロレタリアートの大義に対する共鳴を公けにしていた。更につけ加えねばならないことが、ロンブローゾは、この黨員達の中には、精神的に高揚し本当に恐れを知らない人々、その情熱が神経病理学的に説明しえるだけではなく、ただひたすら気高い心情と繊細な人間愛に帰属さるべき「聖徒」が大勢いると信じていたのである。<sup>(2)</sup> こうしてロンブローゾはまさに愛国者という資格で、遂には社会主義を、さもなければ破滅の憂目に会うだろう民衆の最後の予備錨とみなすに至ったのである。

(1) *Bruno Franchi: Enrico Ferrì, il noto, il mal noto e*

I'ignorato, Torino 1908, Bocca.

(c) *Alfredo Angiolini: Cinquant'anni di Socialismo in Italia*. 2. Aufl. Firenze 1903, Nardini, p. 361. に引用されたロンブローゾのプラムボリーニ宛の手紙(一八九一年)参照。

確かに、その著しい個人主義の故にロンブローゾは、彼と同様外部から、しかも晩年になって社会主義者に転じたエドモンド・デ・アミーチスとは異って、規則的に黨員であることを通告することを固辞していた。ロンブローゾは一度も黨員証の交付を受けたことはなかったし、党費を払う登録黨員になることはいつも拒んでいた。そして党内には、このような振る舞いを不遜なあつかましきであり、規律に背いていると解し、イタリアの社会民主党は過度に知識人政党だと不平を云う過激分子も時には存在したものの<sup>(1)</sup>、それでも尚、イタリア社会主義者の圧倒的多数はこの学者の名声を非常に誇りにしていたため、この特権的地位が拒否されることはなかった。その上ロンブローゾは入党を結局は公式表明で発表したものだから尚更そうはしなかった。なにしろロンブローゾは、ためらうことなく、社会主義は経済的により良く調整された社会秩序であり、不幸な人々の数も減少させうるであろうという信念を公然と宣言していたからである。その場合ロンブ

ロベルト・ミヘルスの同時代人論(3) 氏家

ローゾにはたった一つだけ留保することがあった。即ち、社会主義がより高等な人種の誕生をも誘発するという可能性を単純に拒否してしまうことは彼の良心に副うものではなかった。更に当面のことに関しては、他の政党にみられるのと同じ欠陥——本当に実践的な組織をつくれないこと、他党の最良分子に対する憎悪と中傷、相互の不寛容——が若い社会党にもみとめられるということ、これすら彼のすぐ確信するところとなった<sup>(2)</sup>。

(1) Vgl. *Robert Michels: Sozialismus und Fascismus*, 1. C., Bd. 1, S. 348f.

(2) *Gustavo Macchi: Il Socialismo giudicato da letterati, artisti e scienziati italiani*, Inchiesta, Milano, 1895, p. 70. チェーザレ・ロンブローゾは一八九九年、社会党トリノ支部の手によって市会議員に席を与えられた。市会議場では彼はジュリオ・カザリーニ、マツシモ・ポルタルビー、グスターボ・マルケーゼ・バルサーモークリヴェッリ、アロルド・ノルレンギ、ツィーノ・ツィーニ、ルイージ・オネッティ等有能な社会主義的学者の側に立って、就中保守的、教権的潮流に反対する論陣を張った。それとは反対に一九〇四年には、生来の個人主義から、乃至社会主義的理由からさえも、自らの政党に反抗を企てた。彼と社会主義〔院内〕分派の同

(二五七) 一一九

志との見解の相違の原因は、後者が提案し弁護した水力発電計画に彼が賛成を拒んだことにある。ロンブローゾに依るとその実行は、どっちみち都市のプロレタリアートが負担することになる税金の圧迫を強化し、更には、数百万「リラ」もの過剰負担を負わされたこの町の予算を圧迫し、破産にまで追いやることになろう、というものであった。<sup>(1)</sup>

(1) *Paola e Gina Lombroso: Cesare Lombroso. Appunti sulla vita e le opere. Torino 1906, Bocca.*

ロンブローゾは先ず同志の説得を試みた。それも失敗し、しかも一人の投票棄権を除いて、「院内」分派が先の議案を全力で押し通した時、彼は所与の状況から結論を引き出し、市会議員の辞職を申し出た。「規律と言葉の名誉のために」と彼は表現した。即ち、彼の毀損した党規律の保全と「党」独自の政治的団結の保持という二重の理由のために、というわけである。<sup>(2)</sup>

(1) 『アヴァンティ』二九二三号に掲載されたロンブローゾの『アヴァンティ』宛一九〇五年一月一日付の手紙を参照。

この出来事は、この白髪の学者の、たとえつましい形でなされたものであれ、あらゆる公式の政治活動の断念を意味することになった。しかしそれは決して党との決裂を意味し

なかった。それまでと同様ロンブローゾは社会主義者が喜んで耳を傾ける良き友であり、今後とも彼らに忠告を与えるべく常に用意を怠らなかつた。それまでと同様彼は『アヴァンティ』の最も信頼の置ける寄稿者の一人であった。しかし徐々に彼は、政党としての社会主義の実効性に対する信頼を喪つていった。先ず彼は党の政治的理性に深刻な疑問を持ち始めた。“Segno politico” (政治的夢想) と題された論文で彼は詳述した。ツァーリズム・ロシアの政治状況とイタリアのそれを比較しようとするなら、イタリアのあらゆる疾患を容赦無く暴きたてねばならない。とにかくそうしてみたまえ、そうすれば必ずや、両国の政治情勢の相違とは消え入るばかりの相違でしかないという結論に達するであろう。何故と云って、なるほどイタリアには憲法があり、ロシア政府は未だ専制的ではあるが、それがすべてなのだから。ロンブローゾは、ロシア皇帝との会話の中でイタリア王に語りしめている。「愚かな兄弟よ、君はどうして今だに、望まれている憲法を国民に与えるのをとまどっているのか。君は、君が一枚の紙きれに君の名前を書いたりしたら、君に対する死刑判決に署名したことになるとても本当に信じているのかい」。実際ロンブローゾは、今や民主主義そのものに疑いをもつようにな



った。彼の考える民主的政府の政治とは何であらうか。彼自ら答えている。「そこでもやはり、政府にとっては帰するところ、腐敗を少しばかり広め、少しばかり増やすだけのこと、つまり消息通の間で悪意を込めて統治術と呼ばれていることを行うことでしかない。社会主義者の最も反逆的な分子でさえ、これを手なづけるには、党指導者の猜疑心と嫉妬心を煽り立てるか、もしくは被指導者、即ち黨員大衆にも権力への直接参加の希望を約束するか、これらのいずれかで充分なのである。訓令を下すとか、もしかしたら若干友好的な言葉や約束の表明だけでもしばしば目覚ましい効果をあげる。というのも、実際政府は社会主義を恐れるには及ばないからである。社会主義者は、それが無害であれ、(彼ら自身にとって)有害であれ、とにかく所謂都市社会主義(市有化)に属する法律とか、非常に曖昧な価値しかもたない二、三の労働保護法によつていとも簡単に満足してしまふ。」<sup>(1)</sup>要するにローブローゾは、自らが、社会立法のみならず、とりわけ改良主義と修正主義の断固たる反対者であることを証したのである。一九〇二年、議会の社会主義者が初めてジョリッティの自由主義内閣を支持する投票をしたことを耳にした時、彼はさすが自分の憤懣を表明した。今や労働運動の将来に希望をす

っかり無くしてしまった、と彼は友人たちに宣言した。『アヴァンティ』にも書いた。「事態の経過は私に少しずつ教えてくれた。プロレタリアートが国家権力とブルジョアジーの富に近づけば近づくほど、上流階級の立居振舞を身につけ破壊の道具となつていく。そして次には、胡散臭さではブルジョア政党にもまけないが、にもかかわらずしばしば国民の人氣を得ているため、腐敗した政府——これはこれで自らを自由主義的と称するために彼らの後援が必要なのだが——の道具となつている所謂人民諸政党の分裂と離反が来る。」<sup>(1)</sup>

(1) Cesare Lombroso: Un sogno politico. "Avanti", Nr. 2976.

結局ロンプローゾは、社会党が再び有益で有効な党になるためにはたった一つの手段しかない、それは、一方では夾雑物を清掃し、他方で、唯一の巨大で強力なプロレタリア政党へと団結し、その際いかなる国家権力の誘惑をも遠去け、大衆の真只中での活動に自己を限定すること、これである、と確信するに至つた。<sup>(1)</sup>しかしながらロンプローゾの魂は今や懐疑に満ちていた。ある晩私が彼を食事召いた時彼は来客名簿にこう書き記した。「職人はダイヤモンドを切るのにダイヤモンドを使う。同様に、政治的陰謀家は国民を騙すために

国民を使う。」本書の筆者は一度ならず、ロンブローゾがこう語るのを聞いたものである。自分は労働者組織にはもう何も期待してはいない。イタリア人に再び新しい生命を与えるという自分の夢は見果てぬ夢に終わった。」と。

(一) *Cesare Lombroso: I frutti di un volo. "Avanti", Nr. 2987.*

我々は既にロンブローゾの社会主義の愛国主義的根源を指摘しておいた。彼はオーストリアの支配に対する憎悪を心中深く抱懐していたのである。確かにこの憎悪の根源は二面性を有していた。先ず第一に、ロンブローゾは生れも素姓もヴェローナ人であるということ、即ち、長い間オーストリアの支配に苦しみ、一八六六年の解放後も国境に近いために脅威を感じてきた地方の出身であったということを感じ越すべきである。ロンブローゾ自身一八六六年の戦争には軍医として参加している。そのうえ「第二に」強調されねばならないのは、チェーザレ・ロンブローゾがユダヤ人であり、彼のユダヤ人気質は、少なからず自覚的で情熱的な誇り、往々彼を他宗派と他国民に対する誤った判断へとさそい出した誇りを公然とみせつける底のものだったということである。同様に、彼のすべての意見表明や、預言者的なところがある彼の全本質

には、概ね可成りのユダヤ人的特性が潜んでいた。従ってこの人物を理解するためにはこの事実の認識が真先に必要であるといつてもよい。厳格なカトリックのハブスブルク国家に対する彼の反発は、従って既定のものであった。更には、バルカンと同様、トレンティノ、トリエスタの未回収地問題に於けるオーストリアとイタリア間の政治的角逐が加わった。ロンブローゾはこの政策に全く信を置かなかつた。オーストリアのことに話が及んだだけで彼は怒り表わした。それ故、彼が長年属していた自由主義政党にはその使命を果すことが出来ないことがはっきりしたように見えた時になって初めて社会主義の旗のもとに参じたのである。そして、社会主義もこの宿願をすぐには成就する能力が無いという認識が晩年生れて来た時、彼は再び、無自覚のうちに元の愛国的ごつた煮のところに戻り、青春時代の民族的理念にあらためて大きな意義を与えることになった。ベルリンの『フォアヴェルツ』が企画した平和運動とプロレタリアートの関係についてのアンケートに際し彼は質問に答えた。彼はそれまで、労働者がよつて以て世界大戦の勃発を防止しようとしたあらゆる手段に賛成してきたのだが、今やそのような手段の採用には徹底的に反対する。彼は吐露している。労働者にはやはり、

そのため必須の道徳的エネルギーが欠けているのが明らか  
な事柄についてはいくらおしゃべりしても無駄である。逆に、  
労働者は上流階級出身の狡猾な人々の勧めに簡単に応じ、祖  
国の名に於いて自らの兄弟達を殺してしまうであろうという  
ことは疑いようがないのだ、と。所謂革命的な国際プロレタ  
リアートの癒し難い無能という確信は、ロンブローゾの内部  
では「一九〇五年の」ロシア革命の敗北によって一層強めら  
れた。それが勃発した時彼は多大の希望をかけていたのだが、  
このような考慮を通して、今や彼の内部では、将来の事件に  
際してイタリアを支援も防備も無いままに放置することは法  
外な事であり、正しくもない、とりわけイタリアに対する未  
来の国際的な敵対者が民主主義と自由主義の先頭に立って進  
軍してくるだろうとか、それ故イタリアはせいぜい、まさに  
反動に対する自由原理の楯持ちの役を演ずるよう動員される  
であろう、というようなことは決してありえない、という思  
いが固ってきたのである。こうしてロンブローゾは最晩年にな  
って、二つの理念の間の激しい良心の葛藤へと入りこんだ  
のである。それは、詳細に吟味してみるなら、一九一〇年頃  
からトリポリ出兵、そして世界大戦へかけてイタリア民主  
主義の全体を非常に激しく揺り動かす、矛盾だらけにしてしま

うことになった良心の葛藤である。このような気分を反映す  
るものとしては、一九一〇年秋の死の直前にロンブローゾが  
発表した最後の二つの政治声明も又きつと妥当するであろう。  
一つは、ロシア皇帝のイタリア宮廷訪問反対の過激な宣言文  
に署名を拒否したことである。それは社会党議員オッデー  
ノ・モルカーリが革命の絞殺人に対するイタリア人民の反感  
を表そうとした宣言文であったが、一つの冒険であり、ロン  
ブローゾは、今や突然、全く別の視点からそれを眺めること  
になった。即ちそれは、イタリアとオーストリアアーハンガリ  
ーとの対立下、状況次第では最も価値あるロシアの好意を疎  
んずることになる、非政治的な、それ故有害な試みなのであ  
り、従って彼はそれを非愛国的と忌避したのである。もう一  
つは、Montjuich 要塞でスペインの革命家フェレルルに下  
された死刑判決に対する抗議〔声明〕である。

(一) Vgl. 1. Beilage des "Vorwärts," Jahrgang XXII(1905),  
Nr. 218.

(二) Vgl. "Ananti!" (Anno IX, Nr. 2929, 28. Januar 1905)  
に発表された一九〇五年一月トリノ労働評議会で開催されたロッ  
シア政府抗議集會に宛てられたロンブローゾの文書。

※

トリノーにあるチェーザレ・ロンブローゾの家は長い間、非常に知的なこの町の数少ない知的交流の中心の一つであった。チェレンシア男爵のもとにはピエモンテの富裕な貴族が、上院議員アンニバーレ・マラツィオ男爵のもとには官職にある貴族や将校や音楽家が集まり、そしてチェーザレ・ロンブローゾのもとには——社交的でもっと広げられたかたちではソフィア・ティヴォーリ夫人の場合と同様——専らというわけではないが主に学界人、とりわけ大学で顕著な注目すべきユダヤ人達（セファルディーム〔中世末期スペイン及びポルトガルから追われてきたユダヤ人〕）が集まってきた。いつも愛想良く快活なニーナ夫人の助けを得て、チェーザレ・ロンブローゾは毎日曜日には客をもてなしたものである。客には晩餐の後もイタリアの流儀に則り多くのもてなしがなされたのだが、彼らは皆、芸術的に造作され、知的な雰囲気を持ただよわす部屋に深夜まで居残ったのである。当然ながらその常連は限られた数の、といて決して少なくはない数のイタリア人であった。ここでは、彼の娘のパオラとジーナ、女婿のグリエルモ・フツレローとマリオ・カルテラー、そして同じく大学に職を捜している一人息子のウーゴの他に、以

下のような男性や女性に会うことが出来た。その中には一部イタリア国外でも名声を得、又現に有している人の名もみられる。シチリア人のガエターノ・モスカ。彼は当時トリノー大学の国法学者であり、その雄篇『政治学要綱』は現在ではドイツ人の読者の手にも入るようになった。非常に明敏で正直な男で、数年後には初代の植民地担当次官に任命されることになる。数人の医学部の卓越した教授。たとえば、性的啓蒙の諸問題と取りくんでいたピオ・フォア、そしてアメデオ及びリヴィオ・ヘルリツィカ兄弟、ベネデット・モルブルゴ、精神科医エドゥアルド・マリアーニ、彫刻家のレオナルド・ビストルフ<sup>(2)</sup>、エミリーヤ出身の画家アントン・マリア・ムッキ、ドイツでも著名なトリノー大学教授、経済学者のアキツレ・ローリア<sup>(3)</sup>、哲学者ツィーノ・ツィーニ、文学史家マルケーゼ・ダルトーヴォ・クレヴィツリ（元貴族の社会主義者）、そして本書の筆者。この面々は皆、妻と同伴して来た。それに、トリノーの精神生活である役割を演じた老若の未亡人達、ソフィア・ティヴォーリ、アデーム・ラッペーノ（モーデナ大学の経済学者、故ウーゴ・ラッペーノの夫人）、ガルド湖畔サロ出身のコンテッサ・ジュリア・グリッティ。又トリノーに派遣された有数の外国の代表、例えばアルゼンチ

ン領事ボデロ、フランス領事ブラロンはその夫人とともにロンブローゾ家の歓迎される客であった。更には旅行中の有名なイタリア人、外国人がいて、彼らはビエモンテの州都を立ち去る時には必ずこの著名な字者に敬意を表しにやってくる。又わざわざ彼に会って話をするためにトリノまでやってくる旅行者もいた。定期的に顔をみせる親友の中では真先に、チェーザレ・ロンブローゾの愛弟子であり、刑法分野に於ける彼のライフワークの後継者でもあるエンリーコ・フェッリの名を挙げねばならない。彼のトリノ訪問はいつも、まるで祭りの様に、師の家族全員の大歓迎を受けた。彼は卓越した話術、みごとに頭髪、そして人を魅了する雰囲気的主であった。特に歓迎された客には他に、パリのマックス・ノルドー、フランクフルトのアルトゥール・プフングスト、ロンバルディアの平和主義者で愛国者のテオドロ・モネータ、パリの『レヴュ』誌のジャン・フィノ、ピエモンテの独学の詩人ジョヴァンニ・チェーナ、織維工業家で自由貿易論者のエドアルド・ジレットティ、そして芸術的才能に恵まれたローマ・ニャ州フォルリ出身の外交官マルケーゼ・ラニエーロ・パウリュッチ・デ・カルボリーがいたか、デ・カルボリーは当時パリのイタリア大使館の第一書記官で、そこで彼はイタリ

ア人移民の類型に関する本(『イタリア人移民の涙と微笑』)を書き、後にリスボンとベルリンに派遣された。この面々はすべてロンブローゾの友人サークルのいわば常連であった。これには、時折次のような新しい人物が加わり、彼らは偶然に乃至通りすがりにロンブローゾ家と知り合いになった。例えばスウェーデンのエレシ・ケート、オランダのドメラ・ニーヴェンホイス、ハイデルベルクのマックス・ウエーバー(彼は私が紹介したのだが、つかの間の出会いであり、言葉の上の障害も加わり、この二人の重要な間の互いの精神的理解は発展することなく終った)、セサル・サンティアゴノやホセ・クネオの様なアルゼンチン並びにウルグアイの若い芸術家、フランスやイタリア植民地(エリトレーア)の医者、あらゆる種類の社会主義者と外交官達である。

(一) *Mosca*: Politik als Wissenschaft. Karlsruhe 1926. Braun.

(二) Vgl. *Robert Michels*: Leonardo Bistolfi. Sudwestdeutsche Rundschau, 2. Jahrg., Heft 9, 1. Mai 1902.

(三) *Achille Loria*: Theorie der reinen Wirtschaft (La sintesi economica), Untersuchungen der Gesetze des Einkommens (Übers. von C. Heiß), München 1925, Duncker & Humblot, 506 S.

このようにロンブローゾの友人、知人のサークルは年齢、言語、心情のうえで非常に多様な要素から成っていた。ただ、序で言えば、この人類学者の言葉の知識は二、三カ国語に限られ、フランス語はほとんど理解しなかった。サークルの唯一の紐帯はこの学者に対する一般的な敬意とこの人物に対する敬愛の念だけであった。この人物の自然な謙虚さと素朴な感受性は、世界的な名声も奪うことが出来なかった。彼の本性にある天賦の才、彼の家並びに家族の厚遇と調和は、各々に自己独自の知的長所を示させ、そして独自の牽引力を發揮させ、こうして同一方向へと作用したのである。ジーナ・ロンブローゾが、父は本当に私欲の無い友人達にのみかこまれてこの上無く幸福であると語ったが、全く真実である。<sup>(1)</sup>それはロンブローゾ自身の功德というべきものであった。彼はほど友情を獲得し、それを維持する術を心得た者はそう多くはない。ロンブローゾはこよなく誠実な友であり、常に、友人の行なったあらゆることを善意の光の下で眺め、必要な場合は真心から熱意を傾けて彼を弁護する覚悟をもっていた。彼にとつて友人は決して邪悪な側面は有しておらず、誤謬は犯さず、せいぜい見当ちがいのことを行なうだけであった。敢えてロンブローゾの友人を批判する拳に出た人は災いなるか

な。こんな場合のロンブローゾはちがっていた。自分の判断ではたいてい普遍的で人間的な善意によって導かれていた彼であったが、このような場合の彼は炎と化し、ほとんど均衡を失ってしまった。曾て私は、旅の途中トリノに滞在していたナポリの友人、経済学者で政治家のアルトゥーロ・ラブリオーラを彼のところへ連れて行ったことがある。ラブリオーラはロンブローゾに対し非常に愛想よく、慇懃で、恭しく振舞った。ロンブローゾの方は明らかに楽しそうで、別れ際には、この若い知識人を紹介した私に心から礼を言った。

「彼はすばらしい若者で、とても理知的だ」と彼は私に幾度も繰り返した。一週間後、私は今度は一人でロンブローゾを訪れた。教授は非常に不機嫌だった。何事も胸に秘めておくことが出来ず、すぐに口に出さずにはおれない性格から彼は私に、他に二、三人が同席していても全く容赦無く、私の友人の選び方はいつでも良いというわけではないと不満を述べた。この非難に彼は、ナポリの経済学者に対するあらん限りの罵詈雑言をつけ加えた。何がロンブローゾの判断をこれほど短期間のうちに全く正反対のものに変えてしまったのか。とるに足りないことだったのかも知れない。しかしロンブローゾの性格を考えてみればそれでも大きなことなのである。つ

まり、ラブリオーラはその間にエンリーコ・フェッリを激しく批判する論文を書く誘惑にとらわれたのである。それだけのことである。ただフェッリは、ロンブローゾの心の中では、批判される余地の皆無なる者の一人であった。ところがロンブローゾは、親友のために常ならぬきわどい位置に立たされた場合には、自分自身の品位を自覚しながら、相当の批判をも甘受したのである。彼は邪推というものを知らなかったし、矛盾をも平静かつ沈着に受け入れた。或る晩ロンブローゾが、心霊会で撮られたという、みたところ小さな農婦のような一人の婦人の霊が写っている写真を自慢気に皆に回覧していた時、彫刻家のビストルフィが我慢出来ずに大声を出した、その霊とかいうものは、本当は、どんな市場でも一ソルディも出せば買えるような人形だ、撮影の時に稚拙な小細工がなされたにちがいない、と。だがロンブローはただ温かく内気に笑うだけで、少しも腹を立てはしなかった。彼は心霊術を信じていたのだが。別の折に、ロンブローゾが私に、デンマーク語で書かれた一冊の書物をみせてくれたことがある。それはヴィボルグの精神病院のクリスチャン・ゲイルの書いたもので、犯罪と犯罪人類学の関係を主題としていた。<sup>(2)</sup>「この本を読んでも私にはよく理解できなかった。ただ大事はこと

ロベルト・ミヘルスの同時代人論(3) 氏家

は、この本が私を反駁するために書かれたということだ」と彼は私に言った。続けて「だが注目すべき本であることは確かだ。著者の引用している統計はまさに私の理論に有利な証言をしているからなおさらだ。」それから彼は、この著作がある出版社のためにイタリア語に翻訳するよう私に頼んだ。私は快諾したものの、仕事に追われて実行は出来なかった。ロンブローゾ自身はゲイルに手紙を書き、自分を反駁している書物を翻訳させてほしい旨許可を願っていたのだが。

(1) *Paola e Gina Lombroso: Cesare Lombroso, l. c., p. 89.*

(2) *Christian Geill: Kriminal Antropologiske Studier over Danske Forbrydere. Koebenhavn 1906.*

ロンブローゾはその理論を他ならぬドイツに定着させることには成功しなかった。彼は、彼の観念がフランスとドイツで相応の承認を見出さないうちは国際的な学界に浸透することとは出来ないであろうということを熟知していた。私との会話の中でも、ドイツ学界で彼の理論が嘗めねばならなかった無視という所業に対ししばしば不満をもらしていた。その責は、本質的には、民族的な誇大妄想狂にあるように彼には思われた。それはドイツ精神をとりこにし、政治と世界覇権の

領域からしだいにドイツの学問にまで及び、あらゆる外国の価値に対してドイツの学問を鈍感にしてしまったのだ、と。

ドイツに於ける彼の唯一の弟子であり翻訳家でもある有能なハンス・クレラがドイツではわずかしか成功をかち得られなかったということも、ロンブローゾによると、クレラがイタリアの人類学者の理念にとらえられていると公言出来る勇氣をもち合わせていたという事実にも専ら帰因していた。勿論実際には、ドイツには彼の理論のより広範な支持者がいた。ただ彼らはそう告白することを躊躇していたのである。ロンブローゾはこのグループに若い刑法学派を数え入れていた。その中でも第一大者はフランツ・フォン・リストで、ロンブローゾによると、彼はただロンブローゾとの精神的親和性を首尾よく隠しおせたがために学問と政治に於いて立身したのである。この点に関してロンブローゾは嘲笑的に語るのが常だった。なるほど自らの父親としての資格の追求を恐れる父親というものが存在しても不思議は無い。しかし、自らの父親を認知しようとする息子がいるとは珍しいことだ、と。確かに彼は精神的交渉でもイギリスとフランスを鼻息していた。確かに彼はウィルヘルム二世の政策を、ヨーロッパに於ける自由と民主主義の発展にとって有害であると、横目で見るだ

けであった。ウィルヘルム二世自身は、彼の云おうところによると、もともと「専門的」観点、即ち、臨床医学の観点からの興味を引くだけであった。又確かに彼は、イタリアとフランスの偉人をゲルマン民族の金髪明眸の末裔と断言するルードヴィッヒ・ボルツマンの試みの中には、ドイツに於いて若い学徒達が耽つてきた非科学的なナンヨナリズムの明白な証拠しかみなかったし、早世したこのゾーリンゲンの若き人類学者の研究がたとえどれほど浅薄で政治的にも反合目的的で危険なものであろうとも、政治的汎ゲルマン主義を鼓吹したり、その動きに拍車をかけようとする意図ほど彼と無縁なものではなかったということ、このことを認めるつもりはロンブローゾには無かった。しかし、それらのすべてにもかかわらずロンブローゾは、ドイツの業績、とりわけ医学の領域における業績に対する尊敬では人後に落ちなかったし、ドイツの学問から多くのことを学んだことを喜んで承認したのである。

※

一九〇七年九月のある晩私は妻同伴で、アオスタ溪谷で夏期休暇を過して帰ったロンブローゾに挨拶し、御機嫌をうかがうべくロンブローゾ家を訪れた。私の方は過労でいろいろ



していた。それは三〇代の間でも老いを感じることにある年代の一日であった。私が親しみ深いこの家の勝手知ったる階段を登ったのは既に一〇時近くであった。ところが、建物へ通じるドアにつく前に、私は珍しい物音を耳にした。その小さな、短い打撃音は、丁度、軽い中空のハンマーを打ちおろした時のように、まるで、不気味に、心霊的にある種の霊媒から発せられているようであった。我々は本当に身の毛がよだつ思いがした。もしかして、ここでは秘密の霊たちが棺を釘づけにしようとしているのかしら。丁度その頃ロンブローゾは超越的世界の問題にかかずらっていた。しかし私はすぐに自分がおかしくなった。私は、はりつめた神経のせいだと考え、呼びりんを鳴らすべく手を伸ばした。すぐ扉が開かれ、大きく頑丈そうな金縁眼鏡をかけた巨大な白髪頭が現われた。不愛想というほどではないが、不安からかしわがれ声が「どなた」と応えた。それはロンブローゾ教授本人であった。いかにも彼らしく、くすんだ緑色のすり切れた化粧着を足まで垂らし、帯をよく結ばずにだらしなくさげ、またところインドの僧侶を思わせる身なりであった。白髪の人類学者は、はじめは遅れている本について、そして、当然ながら他のことでも立腹している様子だった。しかしそれも最初のう

ちだけであった。内面から漏れ出する光に促されて私をみとめるようになるや否や、彼はすぐに、例の第二の習性となつてしまった、気に入った人と対面する時の陽気な、ほとんど慈父の如き微笑みを顔にうかべ始めた。我々と再会出来たことを心から喜び、客間へと案内した。控えの間を通り過ぎる時私はロンブローゾ天人に会った。ここで初めて、私は先ほど耳にした物音の秘密を知ることが出来た。老夫婦は小さなラケットを手にしていた。ロンブローゾは室内テニスをしていたのである。「それで」およそスポーツには不慣れで不得意の彼が息を切らし、汗をかいていたわけである。不本意ながら喜劇になってしまったこの場面を私は忘れたことはない。二人のほほえましい家族生活を垣間見せてくれたからである。ロンブローゾは類稀なうっかり者で、物忘れがひどかった。その点で彼は全く大学教授そのものであった。彼を愛しかつ尊敬しているトリノ大学の学生達は彼をからかったものである。彼らはロンブローゾが講義をしている大講堂に、講義の終り頃、所定の患者の替りにこれと微妙に似ている職員を連れて来た。それから彼らは、遂にロンブローゾが自分の誤りに気付き、いたづらをした学生を優しく追出すまで、哄笑しながら教授のすばらしい講義を傾聴したのである。この

ようなことは一度や二度ではなかった。自分のうっかりぶりに気がついた時の彼の純朴な態度については、娘達が、まだ彼の存命中に出した本の中で貴重な数頁として書き残しているが、これには彼自身すっかり喜んでしまった。かくして彼は、旅に出た時は持参した金を紛失すると確実に見込んだ上で、慎重にも、紙幣を着、チョッキ、ずぼんの全部のポケットに分散させることにした。これで、少なくともいくらかの助けになり、かつ突然立往生しないための唯一の方法を発見したと信じたからである。彼が根柢から純朴であるということは、彼が労作を書き下ろす文章と文体の哀れなほどの不味さ加減とも関係している。思想と発見のすばらしいきらめきにはそれに似合った表現が必要であるとは、全く即物的な自然科学者としての彼には思いも及ばなかった。ロンブローゾの人は、偉大な学者は拙劣な文章家でもありうるということの雄弁な証拠であった。

(一) *Paola e Gina Lombroso*: Cesare Lombroso, I. c., p. 90, ff.

この純朴さは、一方では確かに、多くの誤った結論、軽率な学説へとせきたてる軽快さを彼に与え、他方ではしかしながら、彼の幸運なる直観能力とも密接に結びついていたのだ

が、ロンブローゾの場合、残念ながら、これには鍛えられた歴史感覚は伴わなかった。民族と時代の歴史、衣装の歴史、そして人相の歴史にさえも彼は大まかな程度にしか通じていなかった。彼には、個々の事実に関する知識の確実性が全く欠けていた。拙宅でルイ一四世の陶器のメダルをみた時、彼は医者としての見識から、この首を切り落すにはギロチンでも苦勞したであろうと述べた。勿論彼は、刑死したのがルイ一六世であることは知っていた。しかし彼は、ルイ一四世の総鬘、ローマ風のガウン、全く異った面貌にもかかわらず、ブルボン家の最も偉大な君主とその来孫とを区別するだけの歴史家でも人相学者でもなかった。ロンブローゾは他の王家の判断に際しても同様の態度だった。彼は王家というものに対する先入見から自由になることはなかった。曾て彼は語ったことがある。ハプスブルグ家の人間は、美的観点からみても、例外なく面相が悪い、彼らには旧い家系の生物学的墮落がはつきりとみとれる、と。彼の若い同時代人、オーストリアのオイゲン大公は、当時丁度インスブルックで皇軍を指揮していたから、このヴェローナ人研究者と縁が無いわけではなかったのだが、彼はヨーロッパでも仲々の美男であり、貴族の生物学的衰弱の運命という民主派のおしゃべりの虚言

をあげてしまうような、立派な姿かたちの持主であるという  
こと、このこともロンブローゾの眼を逃れてしまった。

この伝記的スケッチの目的は、ただただ、あまり知られて  
いないこの興味深い人物の若干の特徴を性格学的に示すこと  
にある。この人物には、なるほど多くの反対者はいたが、敵  
というものは一人もいなかった。彼は学者臭い頑固さの無い  
偉大な学者であつた。自然科学者と精神科医という外彼の裏  
には、理想を渴望する魂を宿していた。時に純朴に振舞うと  
き彼はまさに幼児の純真さの意味で純朴であり、その純朴さ  
は天才と結びついていた、否、天才の証しであつたのである。